書簡　五（新編井月全集 512）

所蔵者にして此の手紙の宛名人たる柳哉氏の語る所に依ると井月は口で言うことにも遠慮して、家に居りながらこんな手紙を認めたことが多かったと。（高津曰、井月にはまた無遠慮に上り込み、平気で食べ物などを要求した一面も有ったと聞いて居る）

{柳哉は、四の書簡の吉扇の子である。}

一寸記

御繁忙の処恐入候得共、天機様(カ)と言、実に心中容易ならず、一ト先ヅ退散仕度、【天気がよいので、じっとしていられず、ちょっと出て行きます。】

夫レニ付此程より申上候通り、来月十二日ヲ目的、何を申も〇の事せめて紙筆の用だけ御工風偏奉希上候也。【つきましては、かねて申し上げていたとおり、来月の十二日までに、せめて紙や筆を買うためのお金を都合していただきたく、お願いいたします。】{おそらく連句の会を開く予定なのだろう。〇はお金のこと。}

井月拝

柳君　足下